

前回までのあらすじ

もう何度も繰り返し見た夢の中で、キリエ・ソウマは思い出していた。〈機獣少女〉を指したきっかけ、そしてカナコとの因縁の始まり。

夢から目覚めた彼女を待っていたのは、犯罪者として拘束されている現実。誘導されていた節はあるものの、作戦行動中の味方を攻撃したのは間違いなく自分の意思で、キリエは犯した罪に苦悩する。

キリエと同じくオオミヤ・シティに帰還していたアイナ・ボーグマンもまた、別の病院で目覚めていた。見舞いに来ていた父と、共に〈ヒナミ総力戦〉に参加した戦友であり親友のルイゼ・ルンシュテッドとの再会を果たしたアイナは、生きて帰った喜びを嘔みしめる。

一方、〈ステインガー〉の侵攻によってゴーストタウンと化した街に身を寄せていたアサトとカナコの兄妹は、メイド服を身に纏った紅い髪の幼女と出会う。あまりに状況に不似合いな存在に戸惑う二人に対し、メイド服の幼女は「お迎えに上がりました」と告げた。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

〈L・C・ファクトリー〉。

それは元々、稀代きだいの技術者であるロゼット・コダールが立ち上げた個人の工房だった。彼女は純粹に当時存在した機獣に関する技術を追及していただけのだが、やがてそれらは様々な分野に転用され、気付けば東方大陸に必要不可欠なものとなっていた。

だが、彼女の技術は未知の部分が多く、本人以外には解析不可能ブランクボックスとなっていたものも数多く存在した。例えばロゼットの技術を転用した高効率の機関エンジン。これを量産する事は可能だが、修理する事はロゼットにしか出来ないという問題を抱えていた。

天才と凡人の間に横たわる溝みぞは深い。凡人に、過程をすっ飛ばしがちな天才の理論は理解出来ず、また天才には、凡人がなぜ理解出来ないかが判らない。

ロゼットの技術は、そういう領域に達していたのだ。

それでもロゼットの技術の産物は使われ続けた。故障すれば丸ごと買い替えるなり、故障した機能部分単位モジュールで正常なものと交換すればいいだけの事なのだから。

だが当然、そうもいかない状況も発生する。大規模施設に組み込まれた装置等などに異常が起きた場合、修理以外の手段は費用の面で現実的ではない。

そして、すでに東方大陸の暮らしはロゼットの技術の産物なしに維持出来できない段階へと進んでいた。便利さを知った人間は、そう簡単に『不便だった』時代に戻れない。

だからロゼットは後継者を残さねばならなくなった。自分の技術を理解し、習得し、受け継ぐ者を。

これが〈L・C・ファクトリー〉の創始者——ロゼット・コダールが襲名制となった背景である。



ゼヘナ暦二〇一六年十月二十一日——〈ヒナミ総力戦〉発動の翌々日。

「んーっ、所長って大変だなあ……」

伸びをして、大きく息を吐き出しながら、当代のロゼット・コダール襲名者は言った。

長い金髪ブロンドに青い瞳デスクワーク。机仕事用の白衣を羽織っているが、技術者というより女子大生と似た雰囲気ブロンドが強い。現在三十二歳と言っても、信じない者の方が多いだろう。

「んー……」

いまいち集中力が続かない。

〈ヒナミ総力戦〉の翌日は実質的な徹夜状態。更にその翌日である今日は六時間ほど眠れたが、十分に回復したかと問われれば否だ。そんな状態で〈ヒナミ総力戦〉の事後処理を

しつづ、通常業務にも目を通さなければならぬ。

(……あなたはもつと大変だったのかな、創始者さん——)

時は流れ、人々の生活様式も、必要とされる技術や発電システムも変わり、『ロゼット・コダール』という名にも重庄と呼べるほどのプレッシャーはなくなっていた。せいぜい中小企業の社長くらいかもしれない。実際、ロゼットの事を社長と呼ぶ者もいる。肩書としては間違っていないが、しつくりこないで従業員達には所長と呼んでもらっている。

(「ステインガー」の封印施設のメンテも必要なくなったし、近い将来、純粋に技術と施設を受け継ぐだけの時代が来るかもしれない)

古代種と呼ばれる機獣の封印施設——その管理・維持がロゼット・コダールを襲名した者の仕事のひとつだったが、封印は解かれ、封印していた機獣も殲滅されたため、もう必要ないだろう。

もつとも、必要に駆られての襲名制だったらしいので、創始者が自分の技術や施設の継承を望んでいたかどうか、今となっては判らないのだが。

「——おつかれさま、ロゼット」

現実逃避のため物思いに耽っていると、落ち着いた調子でロゼットを労う者がいた。見た目通りなら高校生くらいの、大人びた雰囲気の美少女だ。長い黒髪に一条の白いメツシュ。瞳は真紅。地球から此処、惑星ゼヘナにやってきたクラウド・P・ブランである。

「……………はあ」

「もう、じっと見てニヤニヤしないでよ……恥ずかしいから」

見惚れて思わず溜息を漏らすと、クラウドは頬を赤らめ、もじもじと身を振った。

これはヤバイ。大人びた雰囲気の美人さんが子供っぽく恥ずかしかるとかマジヤバイ。

それがメイドさんなら尚の事だ。

ロングスカートとロングスリーブの黒いドレスに白いエプロン——そう、クラウドは今、

メイド服を身に纏っていた。

「うんうん……可愛いよ、クラウド。アニスに着てもらおうと思っただけで、着てくれなくてね。あんまり言っくと拗ねちゃうし」

「怒るんじゃないか?」

「そう、優しい子だから。土下座も最後の手段に考えてただけで、なんだか申し訳なくなくてやめちゃった」

「そうなんだ……」

その光景を想像してか、クラウドはしみじみと苦笑を浮かべた。

ロゼットの秘書であるアニス。本来の名は「アニマウルペス」という機獣であり、悠久

の時を生きる古代種である。人間の姿となり、人間と共に生き、先の（ヒナミ総力戦）でクラウを庇（かば）って重傷を負い、今は治療に専念している。

その恩に報（むく）いるため、クラウがアニスに代わってロゼットの手伝いを買って出た結果が——メイド服である。

「——あ、紅茶淹（い）れるね」

はっとしてクラウが給仕を始める。手にしていた丸い盆（トレイ）からティーセットを机に移し、同様に載せていたポットから紅茶を注ぐ。普段からやっているのだろう。手慣れた様子で、まるで本物のメイドさんのようだ。

「ミルクは入れる？」

「うん」

「お砂糖はいくつ？」

「今は糖分が欲しいから六個」

注文通りにミルクと砂糖を入れ、スプーンで紅茶をかき混ぜると、クラウは湯気（くゆ）を燻（くゆ）らせるティーカップをロゼットの前にそっと置いた。

「お待ちせいたしました、えっと……お嬢様？」

やや恥（か）ずかしそうに、後半はトレイで口元を隠しつつ、クラウは言った。これはロゼットの仕込みではない。地球のメイドさんは女性の『ご主人様』を『お嬢様』と呼ぶのだろうか。

「……クラウ。結婚して。そして一生、私の面倒を見て」

「くっ！」

ちなみに大人びた容姿をしているが、クラウはこう見えてまだ小学六年生だったりする。なんとというか色々アウトだ。

——こんにちは。

来訪を告げるノックの音が執務室に響く。自分を見失いかけていたロゼットは我に返ると、襟（えり）を正し、「ごうぞ」と来訪者を招き入れた。

「失礼します、所長。急ぎ確認したい事があ——」

入室したのは若い女性。茶色の長い髪を纏（まと）めてアップにし、ロゼットと同様に白衣を羽織っており、彼女もまた技術者に連なる者なのが判る。

「………………。急ぎ確認したい事がありません」

職場の上司の執務室にメイド服を着た少女がいるという特異な光景（ま）を目の当たりにしな

がら、彼女は何事もなかったかのように、中断した言葉を最初から言い直した。

「待って待って。あのね、この子は——」

「大丈夫です」

弁明しようとしたロゼットの言葉を遮り、女性は『状況は察しました。私は何も見ていませんし、所長の趣味に口出ししません』とでも言うように、にこりと笑みを浮かべた。だがロゼットは、その笑みが貼り付けられた仮面で、奥の素顔は軽蔑の色に染まっている気がした。

「いやいやいや！ 聞いて！ 一応、私にも上司としての尊厳がみたいなのがね？」

「大丈夫です」

鉄壁の笑みを浮かべる女性職員。ロゼットの視界の端には、口を挟むべきかと、おろおろする美少女メイドさんの姿があった。

シオリ・ユウキは〈L・C・ファクトリー〉 入所二年目の研究員である。まだまだ経

験的には浅いが、将来性を含め有能である点と、ロゼットに対し物怖じしない性格を買われ、現在は補佐役として彼女を支えている。アニスは『ロゼット・コダールの私的な秘書』という側面が強いため、外部の人間だとシオリを秘書だと思っている者も少なくない。

ちなみに、彼女の淹れるコーヒーは絶品だと、所内では評判だったりする。

「——とまあ、そんな感じだね」

「なるほど。幼気な少女の善意につけこんで欲望を満たしていた——と」

クラウという少女にメイド服を着せて給仕をさせていた経緯を説明したロゼットに対し、シオリはそう解釈した。

「うっ……そうだけど、言い方！」

「そんなどうでもいい事より、私の用件を聞いてください」

この上司に対する雑な扱いこそ、シオリがロゼットの補佐に選ばれた理由なのは所員達の間では暗黙の了解である。

「所長の尊厳はどうでもいいんだ……で、確認したい事って？」

「〈プランE〉の件で担当のダナーさんから連絡がありました。このまま継続していいのか、確認を取りたいと」

〈プランE〉とは、対大型〈カタストロフ〉戦を想定した装備の開発案である。有事に備え、以前から準備と内容の更新のみを繰り返していたが、〈スティングァー〉の出現によって実装が決まった——のだが、すでに標的は殲滅されていた。それで担当者のドミニク・

ダナーが確認を求めてきたのだ。

「あ……ちなみに進捗状況は？」

「九割がた終わっているそうです。あとは組み上げてテストと調整をすれば完成だと言っています」

「じゃあ、今から中断しても開発費用は変わらないよね？」

「誤差の範囲だと思われます。むしろ、ただ廃棄するより有効な活用法を見出すべきでしょう」

シオリとロゼットの間で無言の合図が交わされる。

「だよね」

「です」

この件はMBドライバー・アソシエーション東方大陸支部からの要請で、開発費用も向こう持ちだ。つまり、〈L. C. ファクトリー〉に損失はない。

「では、そういう事で」

「うん、よろしくね」

漠然としたやり取りに留め、用件を終えたシオリは執務室を後にした。その際、クラウが見てはいけないものを見てしまったような複雑な表情を浮かべていたが、致し方ない。

やがては君も知るだろう、人生は映画みたいに甘くはない——と。

「悪い大人だなあ……」

自責の念を込めて、廊下を進みながらシオリは独り言ちた。



〈ヒナミ総力戦〉から三日目。

とある施設の待合室で、ツバキ・タカチホは自販機の飲料が入った紙コップをじっと見つめていた。成分表示が書かれている訳でもなければ、衛生的な不安がある訳でもない。終わったばかりの面会の内容を思い返しているのだ。

ツバキと同じく〈ヒナミ総力戦〉に参加した重量級の槌矛使いの〈機獣少女〉、モカ・カワイ。彼女は作戦中にキリエ・ソウマによって瀕死の重傷を負っていたはずが、サクヤヒメ——人の姿となった〈ステインガー〉——の登場後、そんな事実などなかったように他の作戦参加メンバーに攻撃をしかけた。一面で表情を隠して。

「助けに来てくれたシングウジさんがソウマさんと戦っていた時、『声』が聞こえたんです。意識が朦朧もろうとうとしていたので、はつきりとは言えませんが、なんだか、念話ねんわみたいに心に直接き聞こえた感じで」

面会に来たツバキに、モカは当時の事をそう語った。そして、『助けてほしいか?』という『声』に、モカは『自分よりリツを助けてほしい』と答えたそうだ。ツバキはその場になかったため詳細は判らないが、モカと共に作戦に参加したリツ・ミナトは、キリエの放った強力な一撃によって危険な状態であつたらしい。

「そしたら『声』が言ったんです。リツ先輩を助けるから、頼みを聞いてほしいって。それで私、リツ先輩を助けてくれるなら何でもするって答えてしまつて……」

「結果、傷は治り、あの『面』を付けられて操られていた?」

ツバキが問うと、モカは逡巡し、弱々しく否定した。

「……操られていたというのは少し違います。意識はありましたし、自分の意思でブランさん達を攻撃しました」

「ですが、それはミナトさんを人質に取られていたようなものだからですよ? その『声』は、カワイさんにソウマさんを援護するよう頼んだんじゃないですか?」

ツバキが現場に到着すると、クラウ・P・ブラン、ライカ・ユズキ、バナラ・イカルガの3人を相手に、『面』を付けたキリエとモカが戦っていた。そして二人を解放したのが、ツバキと共に駆け付けた流遠るしおやみひめの〈分断するもの〉ディバイダーだった。

「……はい。身体からだの自由は利くはずなのに、なぜか、逆らえなくて——」
自分のした事に対する恐怖や罪悪感で、モカは身を震わせていた。ツバキにモカと個人的な交流はない。だが、嘘を言っているとは思えない。彼女に悪意はなく、やはり『声』によって強制されていたと考えるのが自然だ。

瀕死ひんしの人間をその場で全快させ、精神的な影響を与える『声』。そんな存在がいるとすれば人間ではない。

「その『声』は、ひどく大仰おおぎようで古風なしやべり方ではありませんでしたか? 『妾』わらわとか、『なのじゃ』みたいな言葉遣いの」

「は、はい……確かに、そんな感じだったと思います」

モカは不思議そうな表情で、だがはつきりとツバキの推測を肯定こうていした。

あの後、モカにリツが無事である事を告げ、面会は終わった。別れ際ぎわに何か言いたそうな様子だったが、何だったのだろうか。

(……今、気にしてもしょうがないか)

作戦中の敵対行動により、今は監視の下軟禁状態だが、ツバキの証言と、面会の記録映像も提出すれば、モカへの不審は晴らせると思う。此処は犯罪者を収監する刑務所ではなく、モカの行為も事件として明るみには出ていない。まだMBドライバー・アソシエーション東方大陸支部内で処理出来る段階なのだ。

『声』の正体はほぼ間違いないサクヤヒメ。そして、やみひめさんの力で解放された今、カワイさんはもう心配するような事にはならないはず

次はキリエだ。恐らく敵対行為の経緯はモカと同様だが、彼女は人格的に問題があるので、面会は正直、気が重い。

(カナコさんのついでだろうけど、私も目の敵にされているし……)

憶えているかは判らないが、先の戦闘では顔を足蹴にしまった。モカの話聞く限り、面を付けていた間の記憶はあるようなので、恨み言を言われる可能性は大だ。いや、キリエの性格から考えて確定だろう。

「……………はあ」

「——まあまあ。随分とお悩みが深そうですわね」

落ちついた調子の女性の声だ。思わず吐いてしまった溜息だが、声をかけられてしまうほど大きかったのだろうか。

ツバキが両手で持っていた紙コップから視線を上げると、修道服に身を包んだ娘と少女が立っていた。一瞬、アヤカ・シユバツアを思い浮かべたが、年齢も違えば髪の色も違っている。年上の娘は二十代前半くらいの、穏やかな印象の金髪の美女。少女の方は高校生くらいで、くすんだ赤毛とソバカスが特徴的だ。

「好きだけ、思う存分、悩みなさい。悩めるのは若さの特権よ!」

赤毛の少女が、勝気な表情を浮かべて言った。なんとなく勢いで良い事を言ったような雰囲気を出しているが、特に何も言っていない。

「ですが、悩むのに疲れたり、つらくなった時は、訪ねて来てください」

赤毛の少女とは対照的に、金髪の娘は穏やかな笑みを浮かべたままそう言うと、ツバキにポストカードサイズの紙を差し出した。

「エイミスの加護があらんことを——」

「あ、お姉様!」

ツバキが紙を受け取ると、娘は最後まで微笑を浮かべたまま待合室を出て行き、少女は

慌てて追いかけていった。

「エイミス教のシスター……」

受け取った紙にもエイミス教の文字があり、教会の住所と連絡手段、裏には所在地の地図が記載されていた。

エイミス教。

ほぼ無宗教な東方大陸において、唯一浸透している宗教である。惑星ゼヘナの創世神話に登場する、機獣を生み出した女神エイミスを信仰の対象としているが、他国にある宗教とはかなり印象が違う。在り方としてはニホンで知った神社に近いかもしれない。神頼みがしたい時に足を運ぶように、悩みや懺悔ざんげしたい事があれば教会でシスターに聞いてもらえる。

「……………」

受け取った紙を仕舞い、トートバッグを肩にかける。残っていた紙コップの中身を飲み干し、ツバキは立ち上がった。キリエとの面会時間の五分前だ。本来であればカナコの役目だが、今それを言っても仕方がない。

聞いた話では、カナコはモカやキリエと同様の面バイザーを付け、橘たちばなアサトを連れ去ったそうだが、続報はない。やみひめはサクヤヒメが発生させたという特異な空間に飲み込まれ、パートナーの〈カグツチ〉はアヤカに預けたまま本人こと行方不明。

近しい人が、優しくしてくれた人が、いなくなっていく。

「……………」

こみ上げてくる感情を押し殺す。

考えても仕方がないのだ——そう言い聞かせ、一步を踏み出した時、ツバキは遠くに聞こえる喧騒に気付いた。



オオミヤ・シテイは三度みたび、阿鼻叫喚あびきょうかんの中にあつた。

一度目は〈プレケース〉の襲来時、二度目は〈ステインガー〉の幼体群が突如姿を現した時、そして今回は——その両方が同時に現れていた。

トカゲのような尻尾と軟体動物のような触手を備え、甲虫のようでありカマキリのようなでもある、部分的には見た事があるのに総合では未知の生物——〈プレケース〉。

それが最初の襲来時の何倍という数で街に溢れているのに対して、〈ステインガー〉の幼体の数は疎まばらだ。新たに発生したというより、生き残りが集まっているのかもしれない。

同じ節足だが、機械的な〈ステインガー〉の幼体は、生物的な〈ブレケース〉の群れに埋もれてしまう事はない。

〈ブレケース〉の長い節足に押し潰される幼児。触手に絞め殺される少女。取り囲まれて腸を食い散らかされる老夫婦。

〈ステインガー〉の幼体の鋏で解体される少年。車両から引きずり出され、建造物の壁面に叩き付けられる女性。

老若男女関係なく、平等に、無慈悲に、命と尊厳が失われていくのを横目に、ただひたすら前に突き進む者がいた。

チャイナ服と呼ばれる独特の意匠のMBジャケットを身に纏い、槍タイプのMBデバイスを振るう、黒いベリーショートの〈機獣少女〉。

リツ・ミナトだ。

(なんで立て続けに、こんな事になるのよ……!?)

決死の覚悟で〈ヒナミ総力戦〉に参加し、結果的に〈ステインガー〉本体の侵攻を免れたというのに、たった二日でこの有様だ。たかだか二週間で三度も住んでいる街が大惨事に見舞われるなど冗談ではない。リツ自身は作戦半ばで意識を失い、気付いた時には病室のベッドで、しかも五体満足どころか掠り傷ひとつ負っておらず、夢を見ていた気分だった。

そこにこの状況である。これ以上の圧倒的な数の暴力との戦いだったが、守るべき一般市民がいなかった分、まだ〈ヒナミ総力戦〉の方がマシだったと思える。

この光景は地獄絵図だ。

(ごめん……っ)

視界の端に、救いを求め手を伸ばしていた老婆の首が飛ぶのが見えた。

胸を突き破られ、血を吐く青年。生きたまま上半身と下半身を引き千切られる幼女。

それらの光景が一瞬で後ろに流れていく。

リツは立ち止まらない。得物である〈シューツェン〉が叩き伏せるのは前方の――彼女の行く手を阻む敵のみ。

数が多すぎて、リツが数体倒したところで状況は変わらない。むしろ彼女が一般人を優先して犠牲になれば、戦力の低下で救える命が減ってしまう。

これは極めて合理的な判断と言える。

だが――

(……欺瞞だ)

大勢を救うために少数を切り捨てる。

命に優先順位を付ける。

大局的に見れば正しい判断でも、切り捨てられる側はたまらない。

(それでも——)

姿勢を低く構え、〈シューツェン〉を腋で固定し、槍の穂先を正面に向け——全力で突っ切る。

眼前には敵の壁。円錐状に展開した機力の壁を纏い、自らが槍そのものとなって障害物を穿ち、進む。視界は体液と肉片に時折、金属めいた部品が現れるだけ。変わり映えないため、どれだけ進んだか判らず、感覚が狂いそうになる。けたたましい敵の悲鳴と破壊音が、それに拍車をかける。思い知れ。情けなど要らない。お前達はそれだけの事をしたのだから。

「くっ——こんのおおおおおおおおおおおおおおおおお……ッ!!」
加速する。

リツの動きが一閃の光となる。極限状態となった機力の発する輝きだ。

「——すごい。機力が溢れてくるのが判る……でも、どうして」

こんな現象は初めてだ。リツは極めて平凡で、〈機獣少女〉として特筆すべき点は何もない、ごく一般的な存在だった。それでいい。必要十分な能力があれば、何の問題もない。あくまで〈機獣少女〉は仕事。きちんと〈カタストロ〉から〈ジェネレーター〉を護り、その給料で趣味の読書を心ゆくまで楽しめれば、彼女にとってそれ以上の幸せはない。一部の『二つ名』持ちのような特別な存在でなくてもいいのだ。

(でもまあ、あつて困るものでもないし、今は助かる……!)

やがて視界が晴れる。

〈ブレイクス〉と〈ステインガー〉の幼体が密集していたルートを抜けると、リツの目的地はすぐ其処だった。



ほんの少し前までは閑散としていた待合室が、今は災害直後の避難所の様相を呈していた。

外に溢れている〈ブレイクス〉の群れ——〈ステインガー〉の幼体も散見される——から逃げてきた一般市民達だ。此処が何のための施設かを思えば、判らなくもない。

ツバキがモカと面会をするために訪れたのはMBドライバー・アソシエーション東方大陸支部——つまり〈機獣少女〉に関する諸々を管理するための協会支部が置かれている

場所だ。此処こゝなら安全だと考えるのも無理はない。だが、《機獣少女》は兵士ではなく、協会支部も基地とは違うため、普段から常駐している《機獣少女》がいる訳ではない。

しかし今は警戒が必要とされ、数名の《機獣少女》が常駐しており、すでに敵と交戦していた。

（ソウマさんとカワイさんに対して用意していた保険が、こんな形で役に立つなんて……）

《ヒナミ総力戦》において不可解な状態で敵対行為を働いた事から、MBデバイスを取り上げるだけでは不十分と考え、万が一に備え常時数名の《機獣少女》が配置されていたのだ。ちなみに、先のモカとの面会の際にも、終始無言しじゅうしで控ひかえていた。

ロゼット・コダールを通して事の詳細を知った協会本部は、二人の警察への引き渡しを避け、東方大陸支部で真相の解明をせよという判断を下した。これは二人の人権と、《機獣少女》全体の社会的な立場、その二つを守るためだった。特に後者——人々の希望である《機獣少女》が敵対行為を働いたなどと、事実であっても知られる訳にはいかない。

誰も幸せにならない真実と、誰も傷付かずに済む嘘なら、多くの人間は後者を選ぶ。

たとえ欺瞞ぎまんだとしても。

（外で戦っている《機獣少女》は六人。此処からだど三人しか見えないけど、敵は数だけなら五倍はいる。この様子だと残りの三人も同じか、それ以上の数を相手にしているはず。これがオオミヤ・シテイ全体で起きているのであれば、増援は期待しない方がいい）
希望を持つのはいい。だが、期待が大きいほど叶わなかった時の落胆も大きくなる。

「……？」

小さな子供と目が合った。まだ小学生にもなっていないくらいに見える。避難してきたのだろう、母親らしき女性が隣で不安そうな表情を浮かべている。

「お姉ちゃん、知ってる！ 『なんこーぷらく』！」

「……あ、たしかツバキ・タカチホ、さん？ 《機獣少女》の」

子供の声で母親もツバキに気付いたようだ。やや表情が明るくなったのは、『二つ名』持ちの《機獣少女》がこの場にいれば、助かるかもしれないと思ったのだろう。

「はい。……でも、すみません。私、今、戦えないんです——」

《カグツチ》がない。MBデバイスがなければ——MBジャケットを展開出来できなければ、《機獣少女》も無力な子供と変わらない。

「そうなの……」

何か事情があると察してくれたらしく、母親は目に見えて落胆していたが、追及はしないでくれた。

しかし——

「——お前、知ってるぞ！《機獣少女》のなんたら言われてる奴だろ！」

ツバキの存在に気付いた若い男が立ち上がると、無遠慮に指を差し、興奮気味に言った。学生ではないだろう。二十代後半くらいで、平日の昼過ぎにしてはラフな格好をしている。

「なんで戦わないんだよ！ バケモノがうじゃうじゃ出てんだぞ!! お前等の仕事だろ

……っ!?!」

かなり息が荒く、目も血走っている。外の状況のせいで恐慌状態を起こしかけているのかもしれない。

「あの、落ち着いてください……。彼女、今は戦えないらしくて——」

「ああっ!?! あんたには聞いてねえよ！」

庇かばってくれたのだろう先の母親が、激昂げききょうした男に突き飛ばされた。ツバキは咄嗟とつさに駆け寄り、なんとか彼女が転倒するような事態は避けられた。

「……………なんだよ、俺が悪いのかよ!?!」

この状況だ、多少は男に同情的な者もいたようだが、今は誰もが彼に軽蔑けいべつの眼差しまなざしを向けていた。だが不思議とツバキは男に対し、『さまざま』とは思わなかった。むしろ、こうして人間は団結するのだと、薄ら寒うすずいものを感じた。

「ふざけんなよ、くそが……っ」

命の危機が迫る中、同じ境遇の人々からも非難の目を向けられ、完全に冷静さを欠いてしまったのか、彼は待合室ラウンジから逃げるように正面玄関へ飛び出すと——突き飛ばされるようにして戻ってきた。

「……………」

戻ってきた男に続いて入室した少女が、無言で彼を見下ろす。

「……………」

何か言おうとしていた男は、突き飛ばされた姿勢のまま尻で床を磨みがき、少女の視界から消えようと後退あしずきった。特異な衣装と手にした武器から、《機獣少女》だと理解したのだろう。

「……………ミナトさん?」

常駐していた《機獣少女》の誰かが戻ってきたのかと思っただが、違った。

チャイナ服と呼ばれる意匠デザインのMBジャケットに、槍スピアタイプのMBデバイス。年齢は高校生くらいで、ベリーショートの黒髪。

《ヒナミ総力戦》で共に戦ったリツ・ミナトだ。

「タカチホさん? なんて……もしかして、モカに会いに?」

向こうもツバキがいる事に驚いている様子だったが、リツには心当たりがあったらしい。

面会に来たのだと告げると、リツはモカの居場所を訊ねた。

「カワイさんの部屋は五階ですが、どうするんです？」

「あの子のデバイスは私が持つてる。今は戦力が必要でしょう？」

モカにMBデバイスを渡せば、彼女も戦える。確かに戦える者は多い方がいい状況だ。

「そのために、この状況で此処まで来たんですか……？」

「……………そうよ。悪い？」

外の様子は窓越しではつきりとは見えないが、(機獣少女)達の戦いは統制が取れているとは言い難い。むしろ何時、破綻してもおかしくないと思える。そんな中を単独で突破してきたのなら無茶が過ぎる。

そんなはずがない——と思う。自分の身を危険に晒してまで、ただの戦力としか見ていない相手の元に駆け付けたり出来ない。

リツはただ、モカを助けたくて来たのだ。

「……………なによ？」

無言でそんな風に思っていると、怒っているというより、不貞腐れているといった様子で、リツはツバキから視線を逸らした。

(この人、カナコさんに似てる……)

まだ今ほど距離が縮まっていなかった頃、カナコはツバキに対して、先のリツと同様の反応を見せる事が多かった。今はそれが照れ隠しだったと判るし、きっとリツも同じだ。

リツとモカは今、あの頃のツバキとカナコに近い距離感なのだろう。そして、これからもっと仲良くなれる未来が待っている。

「……………え、ちよつと、どうしたのよ？ タカチホさん？」

思うところがありすぎて黙り込んでしまったツバキに、リツが戸惑いを見せる。自分が今、どのような表情を浮かべているのか判らないが、クールな印象のリツが戸惑ってしまう類のものであるのは間違いなさそうだ。

「大丈夫？　なんか、その……………」

「はい。もう大丈夫です」

ツバキは気持ちを切り替え、表情を改める。

リツと接した事で、やるべき事が決まった。

「行きましょう。カワイさんの部屋まで案内します」

「……………ええ、お願いするわ」

なんらかの理由で気持ちの整理が付いたのだと察してくれたらしく、リツはそれ以上は触れず、ツバキの提案に頷いた。



スピア
槍の穂が〈プレケース〉の複眼を突き、怯んだところで次は胴体に深く捻じ込む。

アヒレイト
「――滅せよ！」

〈プレケース〉の体内に侵入したMBデバイスを通して流し込まれた使用者の機力が、
アクトイビット・ヴォイス
発動言語によって威力へと転化する。制御を誤ると、それこそ敵を木端微塵にし
て体液と肉片をバラ撒く悲惨な光景となるが、必要十分な威力を出せば不要な被害を出す
事もない。

「……ふう」

原形を留めたまま、複眼から光が消え地面に伏した〈プレケース〉の残骸を見下ろし、
リツは息を吐いた。愛機である〈シユーツェン〉を引き抜き、付着した体液を払い落す。

「はあッ！」

リツの視線の先で、裂帛の気合と共に、小柄な少女が凶器を振るう。

彼女と同じ意匠のMBジャケットを纏い、戦闘に参加したモカだ。小学六年生相応の
小さな身体で、鈍器とも呼べる重量級の槌矛を用い、大きく円を描く動きで周囲の敵を薙
ぎ払う。機力を流し込むまでもなく、元々の重量に運動エネルギーを上乗せされた凶器で
殴られれば、まず無事では済まない。実際、薙ぎ払われた〈プレケース〉の群れ――〈ス
ティンガー〉の幼体も混じっている――は、身体の一部が欠損したり、ただ節足を痙攣さ
せるだけで、まともに動ける個体は見られない。

モカの成長は著しい。実戦に勝る訓練はないという事か。

十分ほど前、モカがいる部屋まで案内すると、ツバキは用があると行って更に上の階へ
向かい、リツとは別行動となった。再会を喜ぶたい気持ちをぐっと堪え、リツはモカに彼
女の愛機〈リーピン〉を渡すと、すぐに外の戦闘に参加したのだ。

「問題なさそうね」

「はい！むしろ、調子良いくらいです！」

周囲を警戒しつつ確認するリツに、モカは元気いっぱいといった様子で答える。

「そう……」

調子が良いのは本当だろう。それはモカの戦いぶりにも表れていた。

（私だけじゃなくて、モカも……どういう事？）

敵の群れを突つ切った際、火事場の馬鹿力では説明出来ない力が出せた。その力は未だ
健在で、その上、今に至るまで、機力の消耗をほとんど感じていない。むしろ身体が軽い

くらいだ。単純に『調子が良い』で片づけていいものなのか不安を感じる。

「リツ先輩……?」

「なんでもない。叩けるうちに数を減らしておこう」

不安からせてどうする。先輩と慕したってくれている相手の前でくらい格好つける。そう自分に言い聞かせ、リツは今考えても仕方ない事柄を頭から除いた。

「まだやれるよね……モカ」

「! はい、リツ先輩……!!」

やや躊躇ためらいがちに後輩の名前を呼ぶと、モカは飼い主にじやれつく子犬のような反応を見せた。名前で呼んでやれば喜ぶと、先の〈ヒナミ総力戦〉の最中さなかに知った。なんだか好意を利用しているようで悪い気もしたが。

「——ちよっと、まだ来るの……!?」

「もうヤバいって……」

常駐していた〈機獣少女〉のうち、近くに来ていた二人の声が耳に届く。その視線の先には、これまでに殲滅せんめつしたのと同じか、それ以上の数の敵の群れが見えた。いったいどれだけの数がオオミヤ・シテイに侵入しているのか……。

(このまま戦ってもジリ貧だわ。これ以上、敵が増える前に脱出すべきだけど、でも何処どこに……)

その場合、避難してきた人々はどうする? 百人近い非戦闘員を、十人に満たない戦力で護りながら逃げ切るなど不可能だ。オオミヤ・シテイ全域で同様の事態が起きているとすれば、増援も期待しない方がいい。

「……………」

見れば、先の〈機獣少女〉二人は戦意を喪失しかけており、集まってきた残りの四人も同様だ。

そんな絶望的な空気が漂う中——

「——待たせたわね!」

空気など知った事かと、無駄にデカイ声が戦場に響いた。

ドレスに甲冑かっちゅうを組み合わせた姫騎士を思わせるMBジャケット。穂先を地面に突き刺し、右手で握にぎっているのは大型の馬上槍ランス。それらを装備するのは明るい茶色のロングヘアと、切れ長の薄緑色の瞳をした、高校生くらいの〈機獣少女〉である。

「主役は遅れてやってくるもの……魍魎ちまもりのよう魍魎を駆逐する聖なる魔槍——〈グングニル〉、

此処に見参！ 穿たれた奴から来るといいわ——!!」

わざわざ考えたのか、彼女は無駄に長い口上を、無駄に大仰に、無駄に滑舌良く、無駄に高らかに謳い上げた。練習したのだろう——無駄に。

「なんで魔槍の人が此処に……?」

「ていうか、『聖なる魔槍』って矛盾してない?」

「アイタタタ……」

声を潜めているが、距離が近いリツには常駐していた〈機獣少女〉達の会話が聞こえていた。

キリエ・ソウマ。

〈グングニル〉の『二つ名』を自称する〈機獣少女〉が其処にいた。



リツ達の前に現れる少し前、キリエは訪ねてきたツバキと対峙していた。面会に来る事は知らされていたが、ノックもなく扉を開けられ、やけに慌てた様子だったため、何事かと思っていると、ツバキは外の状況を端的に説明した。施設内が騒がしい気はしていたが、窓もなければテレビもないため、外の状況は知りようがなかったのだ。

「……そう。でも、私にどうしろっていうの? 〈オーデイン〉がなければ、どうしようもないわ」

ヒナミ・シティの戦いで投擲し、あっさりと躲され、それきりだ。しかも狙った相手が目の前にいるツバキなのだから、なんとも皮肉な話である。

「あなたが知らない訳ないわよねえ? なに? 知ってて馬鹿にしに来たの? 普段は優等生面して、いい性格してるじゃない?」

ツバキは無言。凶星を突かれて反論出来ない——という事はないだろう。そんな少女ではないと、キリエも知っている。だからこそ、それが余計に腹立たしい。

「なんとか言いなさいよ……馬鹿な事してデバイスを失くして、この状況で戦えもしない役立たずだって、そう言えばいいじゃない!?」

言えは言うほど、自分が惨めになっていく。自分は馬鹿で、取り返しのつかない過ちを犯し、償う手段も今はない。

「……役立たずなのは私も同じです」

「え……?」

「事情があって、私もMBデバイスが手元にないんです」

余程の事が無い限り、常に《機獣少女》はMBデバイスを身に着けている。落したり、何処かに忘れてきたなどというのは、まずあり得ない。そして、どれだけ強くても、《難攻不落》の『二つ名』で呼ばれていても、MBデバイスがなければ戦えない。普通の無力な少女と何も変わらないのだ。

「そう……………ごめんなさい」

《機獣少女》にとつて、MBデバイスを失うというのがどういう事か、今のキリエには痛いほど判る。だから、普段であれば絶対に出ないであろう言葉が、つい零れた。仲間意識が芽生えてしまったせいかもしれない。

「——!？」

「ちよ、今のなし！ ていうか何その反応、失礼じゃない!？」

衝撃のあまり言葉が出ないと言わんばかりの表情を浮かべているツバキに、怒りより恥ずかしさがこみ上げ、キリエは喚いた。キャラでないのは自覚しているから。

自分の発言に後悔していると、不意にツバキが右手を差し出す。

「ソウマさん——これを」

「なによ、まだ何か——あ…………」

ツバキが差し出した手に握られていたのは、銀色の光沢を放つ槍の意匠のアクセサリ——キリエの愛機、待機状態のMBデバイス《オーデイン》だった。

「なんで、あんたが…………」

「偶然見つけて、回収しておいたんです。今のソウマさんになら渡しても大丈夫だと判断しました」

そう言つて微笑を浮かべるツバキ。普段なら苦々しく思う澄まし顔だが、不思議と今はそう感じない。

「……………」

手を伸ばそうとして——出来ない。あの時のような破壊衝動に飲まれ、また誰かを傷付けてしまうかもしれない。その恐怖が消せない。

だが、そんなのはキリエ・ソウマらしくない——

「よく戻ったわ。やっぱり、あるべきものは、あるべき場所に帰ってくるのよね！」

ツバキから奪うように愛機を手に取り、抱き締めるように、ぎゅつと胸元で握りこむ。

失つてみて初めて判るものがある。MBデバイスは単なる道具ではなく、《機獣少女》にとっては相棒であり、もはや半身に近い存在のようだ。

「……………おかえりなさい——」

それを取り戻し、キリエは自分の中の何かを満たされていくのを感じていた。



陽の光が届かない地下深く。

人工的に造られたとしか思えぬ空間に、ぞろっとした和服を身に纏った妙齢の女性が佇んでいる。肩をくすぐる艶やかな黒髪。眼前の巨体を見上げる紅い瞳。

サクヤヒメ。

かつて「ステインガー」と呼ばれ、人間の姿へと『進化』し、アヤカ・シユバイツァーの『自爆攻撃』で殲滅されたと思われていた人外の存在。

「――」

サクヤヒメが視線を走らせると、やはり人工的に加工されたと思しき傍らの床に、淀みと呼ぶべき闇が蟠る。これはある種の『門』であり、別の空間から必要なものを呼び出す事が出来る。「フレケース」や傀儡の「機獣少女」がそれに当たり、今回は後者が呼び出された。

人間の成長段階で言えば子供、その中でもかなり幼い部類だろう。露出は多いが、衣装はサクヤヒメの和装に近い仕立てで、長い黒髪を高い位置で一本に纏めている。人間に獣のような耳と尻尾はないはずだが、機獣の力を使う影響だろうか。

無言で立ち尽くす、手に入れたばかりの傀儡の名を呼ぶ。

「たしか、やみひめといったかの」

当然だが反応はない。魂と呼ぶべきものが抜けているから。

「宗教的な解釈だったかの。人間とは面白い考え方をする」

そういう自分も、すでにだいたい人間としての在り方に毒されている自覚があった。

「……………」

「なるほど、これでは独り言とやら変わらぬか。虚しいの」

光のない橙色の瞳は、サクヤヒメを映してはいても、見てはいない。木や石に話しかけているのと何も変わらない。

「……ふん、まあよい。これより己には、その身を捧げてもらう」

サクヤヒメが視線を眼前の巨体に戻す。それは人間の姿からすれば本当に巨大で、「ステインガー」と呼ばれる機獣だった頃の機体と同等以上の質量がある。二つの足で直立し、大きな腕を持ち、尻尾は太く長い。

巨大な――機獣。

「せいぜい可愛がってもらおうがよい」

やみひめを認識したらしく、機獣の胸部の赤い部位が展開する。中には球体が納まっております、それは筒や管で本体と繋がっている。やみひめは無表情のまま跳躍して球体の前に着地すると、なんの躊躇もなく——それと融合した。

やがて、球体とやみひめを納めた部位が閉じると、機獣の目に光が灯った。

「さあ、目覚めるがいい——〈ハメツノマジユウ〉よ」

機能を停止していた機獣が目覚める。永い眠りで凝り固まった機体を伸ばすように、凶悪な爪を備えた腕を左右に開き、全身を反らすように天井を見上げ、金属質な咆哮を上げた。それは歓喜か、それとも嘆きか。不思議とサクヤヒメは、そんな疑問を覚えた。



機獣が啼いた。

その声はオオミヤ・シテイの何処にいても耳に届いただろう。発生源は街のほぼ中心部で、独特の響きを含んだ、とても大きなものだったから。

そして、それは外縁部に近い場所まで移動していたツバキ達にも聞こえていた。

彼女等はキリエを含めた戦力で、集まっていた避難民と共に脱出する事を選び、奇跡的に死傷者を出す事なく此処まで来る事に成功していた。人格に問題はあれど、キリエの実力はやはり本物で、加えてリツとモカの活躍も大きかった。それに触発される形で、消耗していた六人の〈機獣少女〉も奮戦してくれた。

声が聞こえたのは、敵の気配が完全に消え、ようやく人心地ついた時だった。初めて聞く声なのに、なぜか機獣のものと判った。〈ステインガー〉の姿に畏怖を覚えたのと同じく、この星の人間には、無意識レベルで機獣の記憶が刻み込まれているのかもしれない。

……………

声の聞こえた方角を向き、その場にいた全員が絶句した。

あまりに巨大で、まるで冗談のような光景に、誰もが思考停止を起こしていた。

突如として姿を現した巨大な機獣が街を破壊していく——

ゼヘナ暦二〇一六年十月二十二日。

ツバキ達の暮らすオオミヤ・シテイは——崩壊した。

第三十八話

オオミヤ・シティ崩壊

干し終わった洗濯物が陽の光を浴び、風を孕んで揺れている。
 ちよつとした達成感に胸が満たされていると、また遠くから子供達のはしゃぐ声が聞
 えた。

ひどく穏やかで、ゆったりとした時間の流れに、現実感を失いそうになる。すでに外の
 世界は終わってしまっているか、あるいは此処は死後の世界なのではないかと疑わしくさ
 えなる。

「……………」

ふと、ツバキは自分達が身を寄せている建物の象徴を見上げた。ステンドグラスに象
 られた、逆十字の意匠。これと同じものを地球で見た。〈カタストロ〉の支配を受けていた
 クラウに致命傷を負わされたやみひめが、逆十字の黒い結晶体の姿になったのだ。

ただの偶然だとは思う。あの現象がなんだったのかは知りようがなく、エイミス教の
 象徴と関係があるとも思えない。

そう。此処はエイミス教の施設で、オオミヤ・シティに巨大な機獣が出現した日、帰る
 場所を失ったツバキ達はエイミス教会を頼った。教会は災害時の避難場所としての機能を
 備えていると聞いた事があったのだ。直前にエイミス教のシスターに出会っていたとい
 うのも大きい。

此処に身を寄せて今日で五日目。遅れて避難してきた一団に、クラスメイトのスマレ・
 ヒノカゲを見つけた時には、無神論者のツバキも女神エイミスの采配に感謝した。元々、
 宗教に対して思うところはない。信じる事で救われる者もいるだろう。それは個人の自由
 で、他人が口を挟む事ではない。

気になるのはこの五日間、何事もなく平和に時が過ぎていく事。

オオミヤ・シティを破壊した巨大な機獣は、それ以降動きを見せていない。他の街へ移
 動する事もなく、目的はオオミヤ・シティから住民を排除する事だったかのように。

所属事務所である〈オフィス・タカマガハラ〉や、〈L. C. ファクトリー〉の面々とは
 連絡が取れない。

こうしている間にも、取り返しつかない事態が進行しているのだとしたら……。

「ちよつとモカ、ちゃんと皺を伸ばして干して」

「え、こうですか？ ……リツ先輩って意外と細かいんですね」

「あんたが大雑把なのよ」

ネガティブな思考に陥りそうになっていると、並んで洗濯物を干しているリツとモカ
 の姿が見えた。

「えー……。あ、タカチホさーん！」

二人の様子を微笑ましく眺めていたら、気付いたモカに手を振られた。向こうは六年生でツバキより年上らしいのだが、上級生という感じはあまりない。

モカに手を振り返し、リツには会釈をし、スマレの様子を見に移動する。考えても仕方がないのだと、自分に言い聞かせながら。

すると――

「――〈難攻不落〉、すぐ来て！」

随分と慌てた様子のキリエが駆け寄ってきた。彼女もまたエイミス教会に身を寄せている一人である。

「あの、ソウマさん……普通に名前だけでいただけませんか？」

苦笑を浮かべると、キリエは「それどころじゃないわよ！」と言って、ツバキを強引に引っ張った。されるがまま連れていかれると、なにやらちよつとした騒ぎになっているらしく、シスターも何人が集まっていた。

「あれ、〈機獣少女〉よね……?」

キリエの言う方へ目を向けると、誰かが担架たんかでシスターに運ばれている。その誰かもシスターのようだったが、よく見れば服の細かい意匠デザインが違っている。

「アヤカ・シュバイツァーさん!」

〈ヒナミ総力戦〉で出会い、愛機である〈カグツチ〉を託たくした〈機獣少女〉。

中央政府が提出した記録映像で、『自爆攻撃』らしき手段とを最後に消息不明とされていたが、自力でヒナミ・シティから此処ここまで移動したというのか。

「え? 知り合い?」

きよんとするキリエを尻目に、ツバキは運ばれていくアヤカらしき少女を追った。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第三十八話をお届け致します。

えー……お気づきでしょうか？ 今回のラストを以て、ようやく第二十五話 つまり第三部の最初のアバンに追いつきました。いきなりツバキが洗濯物を干しているシーンです。本当はもつとダイジェストで済ませて、本編パートでここまでの流れを書ききるつもりでしたが、まさか四話も使うとは……。

クライマックスまでもう少しです。

あと、『ハメツノマジユウ』は〈デスザウラー〉です。

よきところで謝辞を。

まずは二話ぶりにチェックをしていただいた紙白さんに感謝を。ロゼットがクラウにメイド服を着せるシーンを許容していただき、『ゾイヤミ』には初登場となるシオリ・ユウキのファミリーネームも付けていただきました。ちなみに、シオリは過去にレイジングライガーとアニマウルペスのお話に名無しの女性研究員として、少しだけ登場しています。上司の扱いは雑だけど尊敬はしているデキる部下・シオリをよろしくお願い致します。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。月末になって必死で書くサイクルが続いています。自業自得ですが、必死で書いているので、もう暫くお付き合いください。

2019 / 9 / 29 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女イカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る